

1. はじめにー意義・目的

急速にすすむ高齢化のなかで、住居に関しても難題が多く、これまでは深刻なテーマが中心にとりあげられてきた。そこで振り返ってみると、その基本にある普通の高齢者の住生活が意外に明らかにされていないことに気付かされる。そこで、高齢期の住居をはじめ広く居住空間を考えていく際の拠り所として、高齢者の住生活を把握するために、住居における拠点（性）に注視することにした。

住居の本質的な意味を考えると、人も含め、広く動物はテリトリーを保持し、かつそのなかに拠点をもち、それが住居であると指摘できる。この考えを住宅の範囲に限って適用してみると、住宅というテリトリーのなかで、家族の各成員それぞれが拠点といえるような場所を、拠点性の強弱はあるが、もっているのではないかと考えることができる。

高齢者においては、高齢期以前にくらべ、在宅時間が長くなり、かつ自由な時間が増えることになる。身近な高齢者をはじめとする高齢期における日常生活を観察してみると、住宅における日々の生活時間のなかで、大切な行為を遂行し、また物事に取り組んでいる場所が自然に形成され確保されている状況に至っていることが考えられる。つまり、住宅における住生活の拠点の存在が予測される。さらに、そのような拠点の存在は、住宅およびそのなかにおける住生活を営むなかで、身心ともにくつろげる役割をもつ場合も多い。このような観点から、住生活における拠点の存在は重要である。このような拠点性の高い場所が高齢期に至って確保され形成されるようになる例としては、定年退職後の男性の場合である。

本研究は、高齢期において加齢にしたがい在宅時間が長くなる性向のなかで、住生活の拠点といえるものが形成され、その存在をより強く意識するようになることを確認すると同時に、その拠点について実態を明らかにし、高齢期の住生活の特徴を把握することにより、住生活を豊かにするための住宅整備の在り方について手掛かりを見出すための基礎的研究である。

なお、現在の高齢者については、農村の場合と都市の場合とでは、住宅、生産・生活施設をはじめとする生活環境だけでなく、高齢期に至る過程も違い、したがって高齢期における住生活も異なると考えられる。そこで、本研究では、農村と都市の高齢者を対象とし、比較することによりすすめている。